

特集

男女共同参画推進月間2017

～ みんなイキイキ 男女がともに輝く“おかやま”～

11月は岡山県男女共同参画推進月間です。ウィズセンターでは、記念講演をはじめ、「男女共同参画川柳」入賞作品の展示、登録団体の企画による講演会や活動状況のパネル展示、バザー、交流会などが行われ、多くの参加者でにぎわいました。

記念講演 2017年11月11日(土)



演題

『ペコロスの母に会いに行く

～認知症の母から教わったこと～

おかの ゆういち

講師 岡野 雄一 さん (漫画家)

郷里の長崎で、認知症の母と暮らした日々を描いた漫画「ペコロスの母に会いに行く」の作者である岡野雄一さんに、お母さまと過ごした時間をユーモアを交えて、しみじみとお話していただきました。

父親と離れるために上京

私は、大正生まれで貧しい家庭の長女だった母と、老舗の三男坊で俳優の笠智衆似の父の間に生まれました。体型は母ゆずり、性格は父ゆずりのようです。

20歳のとき、実家の長崎を出て上京しました。父は人づきあいが苦手で、家族を養うために仕事は頑張るものの、ストレスから酒におぼれ、母に暴力をふるう人でした。一緒にいたら自分も父のようにおかしくなるという恐怖に追われていた私にとって、東京での暮らしは、薬のような時間でした。

晩年の父は体を壊し酒をやめ、私も長崎に戻りました。父が80歳で亡くなるまで、父と母と私が共に過ごした10年間は、かさぶたが取れていくような、蜜月のような日々でした。

母が認知症を発症

父の死から1年が経った頃から、母に認知症の症状が見られるようになりました。

汚れものを隠したり、どんどんほどけていく母を見て、「こうまでして生きとかなでも、死ねばよか！」とまで思ったことがあります。

台所で危ないからと、母から包丁を隠したりもしました。何十年も前に父から隠した包丁です。亡き父が居る！と裸足で迎えに飛び出ることもありました。かつて、父から追われ、「助けて！」と裸足で逃げていた母がです。皮肉なものだと思ふ反面、父を一生懸命追いかける母が愛しくもありました。

母との豊潤な時間

その後、母は施設に入所しましたが、そこでの母はなぜか僕の頭をパシパシ叩きながら、数を数えるのです。ある日、レクリエーションで一つ二つと数えながら風船バレーをする

母を見て「あー、俺の頭は風船だったのか…」と気がついた、そんなこともありました。

他界するまでの1年半は、死ぬ瞬間を超スローモーションで引き延ばしたような豊潤な時間でした。横に座っているだけで気配を感じられたのです。

母からは色々なことを教わりました。自分を叩いて酔いぶれた父を寝かしつけながら、「生きとかなば。生きとけばどげんでもなるとやけん」と言った母。「生きていく」ことを常に見つめていた母でした。

描くこと、生きていくこと

私は漫画を描くことで介護ウツを逃れました。ウツを避けるには、プチ親不孝＝少し親を忘れ、介護する自分を解放してやる時間を持つことが必要です。私にとってそれは漫画を描く時間だったのです。

そして母のことを漫画に描くうちに、いつの間にか私のトラウマになっていた若い日の父の姿が消えていました。母が消してくれたのだと思っています。

生きてると、同じことでも若い頃とは違う見方ができるようになります。今、死にたいと考える若者にも、その時まで生きていてほしいと思います。

私は今も漫画を描きながら、母の口癖「生きとけば、どげんでんなる」という言葉の意味をかみしめています。



岡野雄一 著「ペコロスの母に会いに行く」より▲